

国際協力の現地の仕事は生活と不可分だ。食べ物も住む家も休日の過ごし方も国によって変わる。移動も多い。緊急の連絡も来る。仕事と生活の距離感は現地にいると誰もが一度は考えるテーマだと思う。

ウガンダ出張初期の数年は、仕事と生活を切り離そうとしていた。ワークライフバランスを整えようと、休日には日本の小説に没頭した。このやり方を最近変えた。仕事と生活を切り離すのではなく、重ね合わせてみようと思ったのだ。最近は現地語のアチョリ語を教わって農家に披露したり、アフリカの仕事の話を書いたりしている。現地に生活から学び、仕事で恩返しをしたい。

世界の  
景色から



写真は早朝のナイル川。初めて担当した大きな調査が終わった翌朝に撮った。漁に出た舟を水面の鈍い鏡が映す。ゆるやかに舟が進む。漁は生計のための仕事だが、同時に人々の生活そのものだ。仕事と生活が溶け合う人びとの暮らしを見ると、自分もまた、働いているだけでなく、生きているのだと気づく。

写真 吉川 祐作

1993年愛知県名古屋生まれ。ヴァーヘニンゲン大学開発学修士課程修了後、株式会社JINに入社。農村開発の開発コンサルタントとして、ウガンダの技術協力プロジェクトなどに従事。文中で触れたアフリカ日記はnoteに吉川歩名義で毎週日曜に更新中。旅をしたい方はぜひ。

## ウガンダ

仕事と生活のあわいで

